

車椅子の看護師に①

櫛田 美知子

受傷時の思い出

毎年8月5日になると、暑い暑いあの日を思い出す。そして今は何て幸せなんだろう、とそっと手を合わせて祈る。失ったお腹にいた4人目の子も思う。平成6年夕方、1歳の三女の泣き声を聞きながらバタバタと2階へ洗濯物を取り込みに行き、階段から転落。救急救命センターに運ばれた。それも私が夢を持って発展途上国での医療支援を学ぶために、看護師として奮闘していたセンターで自らが命を助けられた。命は取り留めたが、重度障害者（脊髄損傷）となり二度と歩けない体になってしまった。一瞬の出来事であった。

そして患者としての医療を体験することになったのである。当時3人の子供は1歳、4歳、7歳であった。平和で平凡な子育て真っ最中の突然の出来事。人生は急変した。半年間ベッドで安静、動くこともできず、考えることはもう子育ては無理だ。夫も入院中に離れていった。どうしよう。絶望の日々を過ごした。ひとりぼっちで真っ白な天井をぼっと眺めながら過ごした。生きる意味も見失っていた。

幸い半年経ち、脊髄損傷のリハビリテーション病院に転院した。この病院は遠方のため子供たちに会えなくなり、私はますます自分の中でもう存在すら消えそうであった。すっかり母親を諦めかけていた。

骨折して動かなかった左手首も関節形成術（骨を移植する）を受けリハビリが始まった。毎日、作業療法士さん

の手と私の左手が触れる。冷え切っていた心の私だったが、今でもあの温もりは不思議と覚えている。

「お子さんのために給食のナプキンを作りませんか？」と提案され、足は動かないから肘でミシンをかけ、子供の好きなチューリップの刺繍をした。

子供の喜ぶ笑顔が浮かんだ。失いかけていた母親の気持ちを取り戻していた。次々手だけで可能なことが増えていく。絶望の中で希望が見えてきた。

そして、やがて私の手は子供たちを再び抱く手となり、育てる手となった。現在は1歳の孫を抱く手でもある。

この入院時の体験は、リハビリテーションが機能回復、残存能力を活かすというような言葉だけでなく、人間の心を救い、役割を感じるものであった。心を動かす意味あるリハビリテーションを学んだ。

同じ障害のある人の支える力

1年後に退院。再び地域で暮らすには課題がいっぱい。母子家庭、重度障害者、バリアだらけの道路・建物・公共交通。自宅も経済難。しかし道なき道を走らねば子育てはできない。まだインターネットや携帯電話も進んでいない時代だから情報もない。

そんな中、私を支えてくれたのは、同じ障害のある先輩たちであった。一足先に脊髄損傷となられ、車椅子生活をされてきている。医療も発達していない、何も便利なものもない、福祉制度も未整備、また地域での障害者理解も不十分な中、暮らしてこられた工夫や健康管理や心のケアなど、そのアドバイスは教科書にはなかった実体験からの大切な宝物のようだった。

何度諦めから救われたかーやれるかな？と。またその生きてこられた自信や尊厳ある姿は、たとえ排泄の悩み

を相談しても笑顔で体験談を語ってくださり、私の尊厳を保つには十分だった。

そんな先輩障害者とのつながりが沢山出来て、私の子供との生活再スタートは、不安よりも子供と暮らすための喜びが勝った。「ありがとう。お願いします。手伝ってください」と行く先々で助けてもらった。この繋がる場ではいつも笑顔が生まれた。もちろん子供顔にも無邪気な笑顔が戻った。

子供たちも家族でよく出かけた時、段差や坂があってもみんなで手伝ってくれた。そして学校の授業参観・運動会・卒業式・入学式などに参加できた。雪の積もった時は、雪かきをして車椅子で通れるように道を作ってくれた。今では懐かしい思い出。

車椅子の看護師に

25年はあつという間。子供たちもそれぞれに社会人になった。納税者とし



びわ湖の外輪船 ミニガゴ 平成9年8月17日



支えてくれた家族・仲間とともに